

平成30年 5月28日現在

機関番号：13301
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2015～2017
課題番号：15K02040
研究課題名(和文) 『エークナーティー・バーグヴァト』における帰依思想の研究

研究課題名(英文) A study on theory of bhakti in Ekanathi-Bhagavata

研究代表者

井田 克征 (IDA, Katsuyuki)

金沢大学・国際文化資源学研究センター・客員研究員

研究者番号：60595437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：ヴィッタル神に対する帰依(バクティ)の宗教として知られるワールカリー派は、13世紀にマハーラーシュトラで成立し、やがてこの地域において最も影響力の強い民衆的な信仰集団へと成長した。本研究は、16世紀に活躍した学匠エークナートが、『バーガバタ・プラーナ』第11章に対する注釈書としてマラーティー語で著した『エークナーティー・バーグヴァト』を取り扱い、この派における帰依思想の発展経緯を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Varkari sampraday which is known as a tradition of bhakti marga to the local god Vitthal was established in Mahatashtra in the 13th century, and developed into one of the influential religious circle in this area for a while. In this research project, I examined Ekanathi-Bhagavata which is a marathi commentary on the Bhagavata-Purana written by Ekanatha in 16th century, and considered its historical development of the theory of bhakti.

研究分野：印度哲学

キーワード：印度哲学 宗教学 ヒンドゥー教 バクティ 化身 教団 マラーティー語 マハーラーシュトラ

1. 研究開始当初の背景

古代インドで成立した『バガヴァッド・ギーター』には、最高神への絶対的な帰依（バクティ）が説かれている。この最高神への帰依という観念は、古代タミルの宗教詩人たちの影響などを受けつつ発展し、後にサンスクリット語の『バーガヴァタ・プラーナ』において、神への熱情的な帰依によって個人が救済されるという帰依思想として結実した。古代のヴェーダ文献に見られる祭式主義やウパニシャッド的な主知主義が、バラモン祭官など一部の宗教的エリートたちにしか救済の道を示さないのに対し、神への祈りと献身的な奉仕が身分や性別を問わないあらゆる人に救済をもたらすのだと主張するこの帰依思想は、中世に生じたヒンドゥー教の大衆化のプロセスにおいて、決定的な役割を果たすことになった。

とはいえ『バーガヴァタ・プラーナ』は美文調サンスクリットで書かれた難解なテキストであり、民衆がそれを直接理解できるようなものではなかった。しかし16世紀にワールカリー派の学匠エークナートが登場する。インド西部のマハーラーシュトラにおいて13世紀に成立したワールカリー派は、この地域のローカルな神格であるヴィツタル神を信仰する民衆的な信仰集団であり、現在にいたるまでこの地域において大きな影響力を保持している。このワールカリー派は、当初はバラモンやヴェーダの権威を認めず、サンスクリット語を拒否し、中・低位カーストに大きな支持を集めたとされる。そうした状況下において、エークナートは『バーガヴァタ・プラーナ』に対する注釈書『エークナーティー・バーグヴァト』を、民衆の言語であるマラーティー語によって著して、ワールカリー派の帰依思想を体系化したと言われている。彼の注釈書は、単に『バーガヴァタ・プラーナ』のバクティ思想を解説するものではなく、むしろそれまでの素朴なワールカリー派の帰依思想やさまざまな宗教実践、教理などを、サンスクリット的な帰依思想と接続するようなものであったと思われる。エークナートによって示されたワールカリー的な帰依思想は、この派に大きな変化をもたらしたと思われる。彼以降、ワールカリー派はアウト・カーストから正統的バラモンまで、あらゆる人びとを取り込む大きな宗教潮流へと成長することになった。

2. 研究の目的

本研究では、このエークナートが説いた新しい民衆的バクティ思想の詳細を解明することを大きな目的とする。そのために取り扱うのは、彼の主要な著作でありまたワールカリー派における重要聖典の一つと目される『バーガヴァタ・プラーナ』に対する注釈『エークナーティー・バーグヴァト』である。こ

のテキストの主要箇所部分的な校訂・翻訳作業にもとづいて、このテキストの示す帰依思想の全容を解明する。

そして次に、この『エークナーティー・バーグヴァト』の思想を、13世紀頃成立したワールカリー派の初期聖典群（『ジュニャーネシュワリー』『ガーサー』など）や、サンスクリット語で書かれた『バーガヴァタ・プラーナ』をはじめとする諸々のプラーナ文献、法典類などと比較して、エークナートの思想上の位置づけを明らかにする。初期のワールカリー派が保持していたタントラ的な神秘思想や、アンチ・バラモニックな宗教倫理は、エークナートにおいていかなるものと位置付けられたのかを考える。

そして最後に、ワールカリー派の教団史や聖者伝（『バクト・リーラー・アムリト』『バクト・ヴィジャヤ』など）、そして同時期にマハーラーシュトラにおいて発展したマハーヌバヴ派の聖典群（『スメリティ・スタル』『リッディプル・チャリトラ』など）も参照し、中世のマハーラーシュトラにおいてワールカリー派のような帰依思想を信仰の軸とする民衆的な帰依の宗教が、地域社会においていかなる存在であったのか、その実態と、教団に於ける帰依思想に位置づけなどを考察する。おそらくカーストを問わず多くの民衆を引き付けたこれらの帰依の信仰は、この時期にさまざまな教団や聖地などを形成し、さらに発展していったと思われるが、そうした地域社会における帰依の宗教の発展の様子を明らかにして、帰依思想の社会的側面を考察する。

3. 研究の方法

『エークナーティー・バーグヴァト』を研究するに際し、校訂テキストはすでに数点刊行されているが、それらには問題が多く信頼性に乏しい。それゆえ少なくとも重要箇所に関しては、写本収集および校訂作業が必要になることが予想された。

写本収集のために、三度にわたってマハーラーシュトラにおける現地調査を行い、プネーをはじめとするいくつかの都市の資料館などにおいて、写本の複写収集を試みた。すでに本研究計画の立案以前から予備的な調査は行っており、数点の重要写本の所在などは確認済みであったため、現地での資料収集はおおむねスムーズに行われた。また現地滞在期間中は、その時点での研究成果をプネーをはじめとする現地の研究者と検討することで、研究の精度を高めることに努めた。そして現地でしか流通していない関連テキストや二次資料なども収集した。

現地に滞在する以外の研究期間のほとんどは、このようにして収集された一次資料にもとづいて、すでに公刊されているテキストの読みを訂正する校訂作業と、翻訳作業に専念することとなった。

そしてこの基礎的な研究から、まず初年度はまずこのテキストの七章以下に説かれる帰依思想の概要を明らかにした。そして詳細を明らかにし、さらにこの『エークナーティー・バグヴァト』の記述を、後代のマヒパティによって記された聖者伝『バクト・ヴィジャヤ』『バクト・リーラームリト』などと比較して、エークナートおよび彼の帰依思想が当時の社会の中でいかなるものとして位置付けられたかを考察した。

そして研究期間の二年目には、このテキストの冒頭部分に注目し、ワールカリー派の帰依思想における化身概念の解明に注力した。それと同時に、13世紀に成立したワールカリー派の聖典『ジュニャーネシュワリー』や、『バーガヴァタ・プラーナ』『バガヴァッド・ギーター』などのサンスクリット聖典を参照して、先行思想とエークナートの帰依思想の関係性を考察した。

そして研究期間の最終年度には、このエークナートの帰依思想を、ワールカリーと同時期にマハーラーシュトラにおいて展開した帰依の宗教マハーヌバヴ派の聖典『スムリティ・スタル』『ストラ・パート』『リッディプル・チャリトラ』『リッディプル・ヴァルナナ』などのそれと比較することで、ワールカリー派の帰依思想の特徴や、村落社会における帰依の宗教の位置づけなどを考察した。

4. 研究成果

本研究では、『エークナーティー・バグヴァト』第1-2章および第7-10章を中心に、テキスト全体の20%ほどを訳出し、その一部については校訂テキストも作成した。この基礎作業にもとづいて、『エークナーティー・バグヴァト』に示される帰依思想と、それを奉じる当時の教団やサント達に関して以下のような研究成果がもたらされた。

(1) 『エークナーティー・バグヴァト』に説かれる帰依思想は、クリシュナ神への帰依を説く『バーガヴァタ・プラーナ』の帰依思想に依拠して、マハーラーシュトラのローカルな神格であるヴィツタル神をクリシュナ神と同一視する。この時、一なる最高神は地上においてさまざまな姿を取って信徒を救済するのだという化身概念が、きわめて重要な役割を果たした。この化身という概念は、後にマヒパティの時代にはさらに拡張して、エークナートやジュニャーデーヴのようなサント達もまた神の化身とされるに至った。

(2) エークナートによる帰依思想の体系化に際して、初期のワールカリー派においてジュニャーデーヴやナムデーヴらが熱心に主張されたとされるカーストや社会的身分、男女の差異などの否定、神への帰依における個人の平等性などの概念は、エークナートにおいても主張される。しかしそうした主張は

必ずしも貫徹されるものではなく、一方で『エークナーティー・バグヴァト』においてバラモンの価値観や、伝統的なヒンドゥー思想や祭式が必ずしも否定されいてるわけでもない。こうしたワールカリー的な平等思想と、伝統的なバラモンの世界観の折衷は、おそらく多くのバラモンや上位集団をこのワールカリー派へと導くことに成功したと思われる。そうした二重性は、後代の聖者伝においてもさらに顕著となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1. 井田克征「ケーシャヴ・ナーヤクの井戸：中世聖者伝におけるダリト像」『RINDAS プロシーディングス マハーラーシュトラ州におけるダリトの実像：その社会的・歴史的多様性』19-37 頁, 2017 年, 査読無。

2. 井田克征「聖者が生まれるとき 大衆ヒンドゥー教のサント崇拜」『宗教研究』89 巻別冊, 144-145 頁, 2016 年, 査読無。

3. 井田克征「『エークナーティー・バグヴァト』における神の化身について」『インド学仏教学研究』65 巻 1 号, 271-276 頁, 2016 年, 査読有。

4. 井田克征「地上の神の奇矯な振る舞い」『宗教研究』88 巻別冊, 338-339 頁, 2015 年, 査読無。

〔学会発表〕(計 13 件)

1. 井田克征「14 世紀マハーラーシュトラ北部におけるマハーヌバヴ教団について」, 東京外国語大学 2017 年度第 1 回「近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析」研究会 2017 年 10 月 14 日, 東京外国語大学サテライトプラザ(東京)

2. 井田克征「中世マハーラーシュトラのバクティ教団における出家者の実像」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム：南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第 3 回シンポジウム「古代・中世インドの神話、説話、表象」, 2017 年 10 月 7 日, 京都大学人文科学研究所(京都)

3. 井田克征「聖者と社会：群衆に向かって開かれること」, 現代アジアにおける聖者崇拜の諸相研究会(共催国際哲学研究センター「南アジア思想・文化」研究会), 2017 年 9 月 9 日, 東洋大学国際哲学研究センター(東京)

4. 井田克征「中世バクティ教団における出家者 マハーヌバーヴ派の聖者伝から」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」, 2017年9月1日, 京都大学人文科学研究所(京都)

5. 井田克征「ワールカリー派バクティ文学におけるカースト観」二国間交流事業「近代マハーラーシュトラにおける近代カースト観の形成」(研究代表松尾瑞穂)国内研究会, 2017年1月28日, 金沢大学サテライトプラザ(石川)

6. 井田克征「神について語ること：中世マラーティー語のバクティ文学から」東京外国語大学 2016年度第五回 FINDAS 共催研究会(科研基盤研究B・研究代表者：水野善文「南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承」)2017年1月21日, 東京外国語大学サテライトプラザ(東京)

7. 井田克征「人と神のあいだ：インドにおける聖者信仰の伝統について」大正大学総合仏教研究所公開講座, 2017年1月12日, 大正大学(東京)

8. 井田克征「『エークナーティー・バグヴァット』における神の化身について」第67回日本印度学仏教学会, 2016年9月3日, 東京大学本郷キャンパス(東京)

9. 井田克征「聖地研究における古典と現実」スラブ・ユーラシア研究センター平成28年度プロジェクト型共同研究「ユーラシア地域大国における聖地の比較研究」研究会, 2016年7月28日, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道)

10. 井田克征「マハーヌバーヴ派初期聖典に見られる村落社会とカースト」, インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究研究会, 2016年3月26日, 金沢大学サテライトプラザ(石川県)

11. 井田克征「ケーシャヴ・ナーヤクの井戸：中世聖者伝におけるダリト像」, 2015年度 RINDAS 第4回研究会「マハーラーシュトラ州におけるダリトの実像：その社会的・歴史的多様性」(科研費・挑戦的萌芽研究・代表：足立享祐「インド・マハーラーシュトラにおける集団意識とカースト・ダイナミクスの学際的研究」共催)2015年12月12日, 龍谷大学深草キャンパス(京都)

12. 井田克征「聖地と物語：現代インドにおけるマハーヌバーヴ派の事例から」, 国立民族学博物館共同研究「聖地の政治経済学 ユーラシア地域大国における比較研究」, 2015

年11月29日, 国立民族学博物館(大阪)

13. 井田克征「聖者が生まれるとき：大衆ヒンドゥー教のサント崇拜」, 第74回日本宗教学会, 2015年9月5日, 創価大学(東京)

〔図書〕(計 1件)

1. 井田克征, 丸善出版『インド文化事典』, 2018年, 218-219頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

井田 克征 (IDA, Katsuyuki)

金沢大学・国際文化資源学研究所センター・客員研究員

研究者番号：60595437